柳田国男の「国家論」試論

——農政学から民俗学への転換における一体説のもう一つの解釈——

孫　　敏[1]

はじめに——柳田国男の「農政学から民俗学へ」についての諸説

柳田国男は有名な民俗学者であり、そして思想家とも評価できる人物である。その生涯は文学・農政・民俗という三段階を経たということもよく知られている。特にその「農政学から民俗学へ」の転換が注目されてきた。その転換についての論説は、大きく（一）断絶説、（二）一体説に分けられる。

断絶説の代表は岩本由輝・福田アジオ[2]などで、その解説は大体同様であり、柳田国男は農政学という分野で挫折・失敗をした結果、新しい分野として、民俗学を開拓してきたというものである。

一体説の代表としては藤井隆至・三苫利幸[3]などである。藤井は経済・倫理・教育の視座に立って、柳田の農政学は経済研究であり、自助と協同の倫理を強調し、民俗学は人間研究であり、自助と協同の倫理を日本人の自己認識として発見し、経済問題を倫理を通じて教育問題に帰着したと提起した。三苫利幸は「国民－国家」構想の視座に立って、柳田の農政学は経済的な側面をもち、「国家」へと「国民」を回収するという農業政策的かつ国策的な提言であり、民俗学は倫理的な側面をもち、自発的に「国家」へ回収されることを望む「国民」の創造という提言であり、この二つの提言は相互補完の関係にあると主張した。筆者はこの「一体説」の流れに従って、「柳田国男の国家論」という視角を提起し、新たなもう一つの解釈を試みていく。

一　農政時代における柳田国男の「国家論」

柳田国男は1900年に帝国大学法科大学政治学科を卒業した。当時の法科大学政治学科では、社会政策学の影響が強く、政治・経済・法学は一体とされ、国家に指向していたのである。[4]柳田国男はこのような雰囲気の影響を強く受けており、その論述には「国家」への指向が如実にあらわれている。

(一) 農政学の目的について

柳田国男にとって農政学は、「農業経済上の問題」ではなく「政策上の問題」であった。したがって、農業を研究する場合、「一人の国の政治家として」、「一国の未来如何、一国の繁栄如何と云ふ広い意味から考え」なければならない。[5] 経済政策学の問題は、「其根底を為す者は国家原理に関する思想[6]である。つまり、農業の問題は経済だけの問題ではなく、政策上の問題でもあり、ひいては国家にかかわる問題でもある。その根底にあるのは「国家原理」であった。農政学は政策学であり、「国家」学でもあったと考えられる。

国民経済を一つの機械にたとえるなら、農業はその歯車でもあり調革でもある。国を形づくる村、村を構成する家、家を組織する個人と、段々に端から端を見渡すと、其間の最も大きい経線は農業生産である。農業は、一国の生存と密接な関係を持っている。[7]

農業の問題は「日本の国運を左右すべき緊急要件」であり、政策学は「国家の生命健康を以て実験の犠牲と為す能はざる」ため[8]、農政学は非常に重要な、熱意を持って研究しなければならない学問なのである。

総じて言えば、農政学の目的は農業にあらず、国家にあるのである。

(二) 農政学を通じてどのようにして国家の目的を実現するか

それでは、農政学は政策学として、どのようにして「国家」の目的を実現できるのか。

まず、農業政策の目的は「生産の増殖」にあり、国家の希望は「国富の増加」にあるが、「之に由りて猶一層大なる目的即ち国民総体の幸福を進むるの用に供するが為にして、生産其物は個人にとりても国にとりても決して其終局の目的に非ざればなり」。これは「農業に止らず、他の生産業に於ても」同様である。[9]

次に、実現の手段としては、「国家権力の発動に依り法規の作用を以て其目的を遂げんとするもの」と「単に私人の結合協力に由りて其奏効を期するもの」がある。たが、民間に旧習があるので、自家の経済上の地位を覚知できない。そのため、国家は法規を設けて国民の注意を喚起し、各種の便宜を提供する必要がある。[10]国家の任務は「迷を去り誤を正し、唯個人の力及ばざる部分に付てのみ助力を与ふべき」[11]である。

同時に、「一国全体としての進歩発達は、決して跛行的繁栄によりて之を求むること能はざるなり」。国家の幸福の具体的な表現は国民にあるが、特別の一階級の利益は決して国の利益ではない。そして、私益の総計は即ち公益ではない。

つまり、国の経済政策は階級の利益争闘より超然独立していなければならない。[12] 国の目からは、賃役労働者であれ、自営労働者であれ、相当の資産家であれ、小作農であれ、大地主であれ、水呑百姓であれ、一視同仁にすべきである。[13]

そして、農事改良は国のためでもあり、個人のためでもあり、二つは統一可能なのである。だが、農事改良の最終的な目的は国家の利益にあり、その手段としては個人の利害を考える必要もある。この本末関係は誤るべきではない。[14]

総じて言えば、農政の目的は増産であるが、国家の目的は農業・工業・商業など各産業の増産を通じて国富を増加し、国民総体の幸福を追求し、そして、国家の永遠の幸福を実現することである。その実現手段としては、人民の自発より政府の導引を重視している。国家は「部分」の利益、つまり各産業と各階級の利益から超然して、一国「全体」の幸福を追求していく。国家と個人の利益は統一できるものであるが、国益は本であり、個人の利益は末であり、終局の目的は国家の利益にある。

(三) 国家の理想像

ならば、さまざまな経済政策を通じて、どのような国家の理想像を実現しようとするのか。

> 人間ノ生命ハ限アレトモ国家ノ生命ハ理想トシテハ永遠ナリ個人ハ百年ノ身計ヲ為ス必要ナキモ国家ハ常ニ永遠ノ幸福ノ為ニ企劃セサルヘカラス[15]

> 国家といふもの在りて、天子民を治め玉ふからは、成るべく多数の人をして十分の幸福を享けしめ、困窮なる境遇に陥るものゝ一人も少なからんことを期するを以て其理想と為さゞるべからず。[16]

> 臣民の各員は悉く皆国家の一盛一衰に付きて責任を分担し、国家生存の目的の為に応分の寄与を為すべき義務あることが、明白に認識せられたると同時に、国の進歩の結果即ち増加したる利益に対しても亦、各臣民は遍く其分配に与らんことを要求し、其要求は至当と認めらるゝに至れり、……[17]

国家という機構において、天子が国民を管理し、国民は国家に対する責任を分担し、国家から利益をもらい、国民は一生の幸福となり、そして、国家は永遠の生命の幸福を実現する。これは「国家の理想像」である。ここから見れば、

柳田国男の農政学の「国家指向」は明らかとなる。

二　民俗時代における柳田国男の国家論

農政時代に比べると、柳田国男の民俗時代は多少複雑であるといえる。民俗学の成果は厖大すぎるため、人々はその華やかな成果に目を向けてしまい、その学問の本来の目的を忘れがちなほどである。続いては、柳田の民俗学の真相に迫っていく。

(一) 民俗学の目的について

柳田の学問の目的についての見方は一生を通じて変わることはなかった。学問の目的を提起する場合、いつも「国の為の研究」[18]、「一個の悩み闘ふ邦の為に」[19]、「国の学問の為に」[20]、「国を憂ふる」[21]、「御国の為に」[22]など「国」と連結して論じていたのである。

民俗学は、「何に使はうかの問題が起つて、始めて我々の働いてもよい事業になる」[23]のである。

> 民俗学の本来の任務は、眼前の社会の生活諸相の中から、特に異色のあるものを抽出して、其来由を究むるに在ると説く人が外国にも有るが、是は俗説弁時代の遺風であつて、やゝ狭隘に失した定義かと思はれる。……今日世上の最も思ひ惑ひ、且つ耳を欹てゝ聴かんと欲する点が、何れに在るかを知ることによつて、今後の捜索の方向を指示せられ、更に又各自の興味を深めて行くことは、妥脇でも屈従でも何でも無い。寧ろ一個の気まゝな選択によつて、知り得たものだけを人に強ひんとするのが、学問を物ずきと評せしめ、史的随筆と嘲らしむる原因ともなるのである。[24]

> 民間伝承論が如何なる学問であるか……此学問が決して太古史或は有史以前の研究を其目的にして居ないことは勿論であるが、我々の方法に拠れば、過去ばかりか現在をも知る可能性は十分あるのである。……実をいふと今日社会を論じ、国民の福祉を考へる者が、貧民窮民の実際を知らな過ぎる。我々の学問がもつと進んで、彼等に教へてやるやうになることが望ましい。さういふ為にも此学問の成熟が急がれるのである。[25]

> 郷土研究の目的は果して何であるか。……斯ういふ国家多事の際にも……

今日の如き時世の為に、此学問を以て予め備へて置かねばならぬといふことを唱へて居たのである……個人の一生などゝはちがつて、国家の生命には案外に余裕がある。時おくれだとは言つても、……間に合はぬと迄は言ひ切れない。……是を何とかして少しでも世の中の役に立つ知識にまとめ上げて御目に掛けたい、といふ念願を、誰よりも強く私は持つて居る。[26]

つまり、物の由来を究明することが民俗学の目的とするのは狭隘な考え方であり、むしろ「世」のための民俗学こそ民俗学の道である。民俗学は過去を研究しているようだが、この過去は現在・未来へと発展するための知識の準備であり、それは「国家」「時世」のためであると同時に、国家の「永遠の生命」のためでもある。これは、明らかに農政時代と同様である。

(二) 民俗学を通じてどのようにして国家の目的を実現するか

それでは、民俗学はどのような時世の要求にしたがって、国家の目的を実現するのか。

「日本は地方的に久しく色々の異なる暮らし方をして居た国だが、是まで政治家などの頭にある村なり農家なりは、各人めいめいの限られたる見聞によつて、一つの型をこしらへて、それが全国を代表するやうに思つて居るのである」[27]。「今日の憂患は、国の為に働かうといふ努力熱意の欠乏では無くして、寧ろ其忠誠を意義あるものたらしむる智能分別の不足に在」る。[28]

つまり、国は「自ら知る」必要があり[29]、「世相を解説する」「実際の」学問が、「国家の急務である」[30]。「現代の不思議を疑つてみて、それを解決させるために過去の知識を必要とするのである。」「郷土研究の第一義」は、「平民の過去を知ること」で、つまり「自ら知ることであり、即ち反省である」[31]。このような反省を通じて、国「一体として」賢明にするのは重要である。[32]

そして、日本の経済事情は「結局は訓諭よりも当事者の自覚的研究を慫慂する方が大事である」[33]。時代の大任を「外交官や、時の武人団の意向などに」委ねて置くわけには行かない。「国民自身が直接この重要なる根本問題を考へて見なければならぬ」[34]。人民の中に自然に成長したものに対しては、法令その他の政府の意思は「たゞ間接にしか干与して居ない」[35]。つまり、政府の力より、国民の自然的力により期待していたのである。

総じて言えば、国の過去を解説する学問が国家の急務であり、民俗学を通じて国「全体」を賢明にするのが民俗学の任務である。その実現手段としては、

政府より国民の力を重視することである。これは、農政時代に比べて明らかな違いだと考えられる。

(三) 国家の理想像

それでは、民俗時代の国家の理想像はどうだろうか。

> 人間の実生活から云つて重大な幸福感といふものも、昔からは随分と変遷して居る。是は第一番に我々が認識しなければならぬところだと思ふ。[36]

> 先祖代々くりかへして、同じ一つの国に奉仕し得られるものと、信ずることの出来たといふのは、特に我々に取つては幸福なことであつた。[37]

人間の幸福感が変遷しているというより、柳田の幸福感が変わったと考えられる。民俗時代の柳田にとっては、最も大きな幸福は農政時代のような生活の豊かさではなく、国民代々が国家に奉仕することであった。ただ変わらなかったことは、国民の幸福は「国家」にあるという点である。これこそが、柳田の民俗時代の国家の理想像であった。

三　農政学から民俗学への転換における一体性

こう見ると、農政学であれ、民俗学であれ、学問として、その目的は同じく「国家」である。学問は時代の「助言者」であり、「指導者」でもある。[38]柳田は学問の研究を通じて、国家の発展方向を指揮しようとしていた。その指向は国家の理想像である。

(一) 農政学から民俗学への転換の原因

ならば、どうしてその学問は農政学から民俗学へ転換したのか。これについても、柳田は少し触れている。

> 学問のみが世を済ふを得べし……なるほど我邦目前の社会相は、必ずしも美しく又晴れやかでは無い。……在来の治療法では不十分であつたこと……此上は新らしい方法の発見、其次には必ず救はうといふ決心とを必要とするのみである。[39]

土地に拠つて家の保存を確実にしようといふ考へ方も、物質ばかりの側面からこれを説明することが出来ない。今の農村の動揺苦悶の底にも、善し悪しは別として、古い信仰の名残のあることは、これを認めずには居られぬであらう。……やはり上代信仰の問題を度外におくことは出来ない。これを要するに今日郷土史の研究によつて明らかにしようとして居るのも亦一面世に隠れたる御国振りであつた。……併し学問が世を救ふべきものであるならば、今はまたこの方式の御国学びが入用になつてきて居るのである。つまりは学問に対する世間の注文が新しい時代に入つてまた一つ加はつたのである。それは何かと言へば「人が自ら知らんとする願」である。我々は是非ともこれに答へなければならぬ。[40]

つまり、時代の転換に伴い、農政学では不十分となり、新しい方法が要求されるようになった。この新しい方法こそが、民俗学である。農政学から民俗学への転換の原因は、農政学の挫折などではなく、新しい時代が発した学問に対する新しい要求の結果であった。

(二) 潜んでいる柳田の「国家論」

柳田は生涯を通じて「国家論」という言い方を口に出したことはない。しかしながら、その学問の全体像から見れば、その生涯の学問の根底に潜んでいるのは「国家論」ではないのか。

国家ハ人民ト領土トヲ以テ之ヲ構成ス領土ハ単ニ人民ノ入レ物ニ非ス統治権ノ及フ所ヲ明ニスルノミノ手段ニハ非ス夫自身亦国ノ元素ヲ為スモノナリ国民ノ側ヨリ見ルモ土地在ルカ為メニ始メテ集合シテ繁栄スルコトヲ得啻ニ集合スルノミニテハ不可ナリ更ニ其土地ニ於テ幸福ナル生活ヲ為サシメンニハ土地ヲ利用セサルヘカラス国家ト謂ヘハ必ス領土アリ国民ノ幸福カ領土ノ広狭ト相消長スル所以ハ実ニ是ニ在リ……領土ト国民トヲ連結スルニハ必ス人民ヲシテ領土ノ上ニ定著セシムルヲ要ス土著ハ即国家存在ノ要素ナリ土著アリテ始テ茲ニ近世的意義ニ於ケル国家ハ確立スルナリ而シテ此ノ土著ノ起源ヲ為スモノハ亦農業ナリ語ヲ換ヘテ言ハヽ土地ト人民トヲ連結セシムルハ農業ナリ国民ノ浮動的分子ハ農業ノ衰微ト共ニ増加スヘシ農業ハ国民ノ錨ナリ……国家ハ現在生活スル国民ノミヲ以テ構成ストハ云ヒ難シ死シ去リタル我々ノ祖先モ国民ナリ其希望モ容レサルヘカラス又国家ハ永遠ノモノナレハ

将来生レ出ツヘキ我々ノ子孫モ国民ナリ其利益モ保護セサルヘカラス[41]

柳田による「国家」についての詳しい論述はこれしかないのである。当時の柳田にとって、①国家は国民と領土という二つの要素から構成されている；②領土は国民の幸福の根拠であり、国民を領土につなげるのは農業である；③国民は今の国民・死んだ祖先・生まれる子孫からなっている。これは、柳田の「国家論」の雛形と言える。②の内容があるからこそ、柳田は農政学に精を込めたのだと考えられる。

民俗時代になって、この「国家論」の雛形も進化していった。①と③は変わらなかったが、②の内容は変わったのである。つまり、国民の幸福の根拠は要素一の領土から要素二の国民に転換した。したがって、その学問も自然に農政学から民俗学へと転換したのである。ただし、民俗時代では、柳田は「国家要素」などについては一度も論及しなかった。

終わりに

上から見ると、柳田国男の農政学と民俗学の一体性が明らかになった。農政時代においては、柳田は国家の要素一である領土に注目し、農政学に集中して、国民の幸福を追求し、国家の永遠の生命を追求していた。民俗時代においては、柳田は国家の要素二である国民に注目し、民俗学に集中して、国民の幸福を追求し、国家の永遠の生命を追求していた。柳田の究極的な目的は最初から最後まで「国家」であり、その生涯の学問の根底に潜んでいるのは彼の「国家論」である。

注

1　筆者は東大での研究活動を日本国際交流基金「日本研究フェローシップ」の援助で行っている。

2　岩本由輝『論争する柳田国男——農政学から民俗学への視座』御茶の水書房、1985年。福田アジオ『柳田国男の民俗学』吉川弘文館、1992年。

3　藤井隆至『柳田国男　経世済民の学——経済・倫理・教育』名古屋大学出版会、1995年。三苫利幸「柳田国男の『国民－国家』構想——農政学と民俗学——」『社会思想史研究』北樹出版、NO.24、2000年。

4　八木紀一郎『近代日本の社会経済学』筑摩書房、1999年、10－17頁。

5　「時代と農政」『柳田国男全集』第2巻、筑摩書房、1997年、272－273頁。以下は『全

集』に省略。
6 「農政学」『全集』第1巻、筑摩書房、1999年、266頁。
7 「時代と農政」『全集』第2巻、筑摩書房、1997年、240頁。
8 「農政学」『全集』第1巻、筑摩書房、1999年、278頁。
9 「農政学」『全集』第1巻、筑摩書房、1999年、268頁、274頁、282頁。
10 「産業組合」『全集』第1巻、筑摩書房、1999年、10－11頁。
11 「農政学」『全集』第1巻、筑摩書房、1999年、255－256頁。
12 「農政学」『全集』第1巻、筑摩書房、1999年、196頁、197頁。
13 「最新産業組合通解」『全集』第1巻、筑摩書房、1999年、136－137頁。「時代と農政」『全集』第2巻、筑摩書房、1997年、379頁。
14 「農業政策学」『全集』第1巻、筑摩書房、1999年、354頁。
15 「農業政策学」『全集』第1巻、筑摩書房、1999年、290頁。
16 「産業組合」『全集』第1巻、筑摩書房、1999年、15頁。
17 「農政学」『全集』第1巻、筑摩書房、1999年、266頁。
18 「時代と農政」『全集』第2巻、筑摩書房、1997年、238頁。
19 「民間伝承論」『全集』第8巻、筑摩書房、1998年、19頁。
20 「神道と民俗学」『全集』第14巻、筑摩書房、1998年、81頁。
21 「氏神と氏子」「新国学談3」『全集』第16巻、筑摩書房、1999年、241頁。
22 「敬神と祈願」「新国学談3」『全集』第16巻、筑摩書房、1999年、289頁。
23 「民間伝承論」『全集』第8巻、筑摩書房、1998年、21頁。
24 「国史と民俗学」『全集』第14巻、筑摩書房、1998年、126頁。
25 「民間伝承論」『全集』第8巻、筑摩書房、1998年、193頁。
26 「郷土生活の研究法」『全集』第8巻、筑摩書房、1998年、201頁。
27 「郷土生活の研究法」『全集』第8巻、筑摩書房、1998年、203頁。
28 「国史と民俗学」『全集』第14巻、筑摩書房、1998年、199頁。
29 「民間伝承論」『全集』第8巻、筑摩書房、1998年、10頁。
30 「国史と民俗学」『全集』第14巻、筑摩書房、1998年、198頁。
31 「郷土生活の研究法」『全集』第8巻、筑摩書房、1998年、216頁、202頁。
32 「国史と民俗学」『全集』第14巻、筑摩書房、1998年、124－125頁。
33 「時代と農政」『全集』第2巻、筑摩書房、1997年、236頁。
34 「青年と学問」『全集』第4巻、筑摩書房、1998年、14頁。
35 「氏神と氏子」「新国学談3」『全集』第16巻、筑摩書房、1999年、257頁。
36 「民間伝承論」『全集』第8巻、筑摩書房、1998年、181頁。
37 「先祖の話」『全集』第15巻、筑摩書房、1998年、148頁。
38 「国史と民俗学」『全集』第14巻、筑摩書房、1998年、88頁。
39 「青年と学問」『全集』第4巻、筑摩書房、1998年、11頁。下線は筆者、以下同。
40 「郷土生活の研究法」『全集』第8巻、筑摩書房、1998年、261－262頁。
41 「農業政策学」『全集』第1巻、筑摩書房、1999年、300－301頁、293頁。